

平成29年度香川大学公開セミナー

近代化と学問——19世紀末アジア知識人の葛藤——

本稿は平成29（2017）年10月1日に旧多度津藩家老林求馬邸で行われた公開セミナーの記録である。

開会	
報告1. 東洋の学問から、西洋の学問へ	山本 珠美
報告2. 近世から近代へ	山本 裕
報告3. 中国知識人の近代	張 暁紅
質疑応答	

開会

それではお時間になりましたので始めさせていただきますと思います。

本日はこんなにいいお天気の中、林求馬邸で開催されます香川大学公開セミナーにご参集いただきまして、本当にどうもありがとうございます。香川大学生涯学習教育研究センターの准教授をしております、山本珠美と言います。

本日一つ目の報告ということでお話させていただく者ですが、はじめに、このセミナーが開催されることになった経緯について、簡単にお話させていただきます。今から4年前、国の文化審議会で「今後の文化財保護行政の在り方について」（平成25年12月13日）という答申が出されました。全国各地にたくさんの文化財があるけれども活用されていない。価値のあるものとして文化財に指定されているわけですから、もっと活用するようという答申が出されて、各地の、大体文化財というのは教育委員会が所管していますので、そちらのほうに通知が出ました。今日も県の教育委員会事務局の方が来てくださっているんですけども、県教委の文化財担当の方から大学と何か連携してできないかというご相談がありました。そして、おとし、平成27年度から香川県内の文化財として指定されている建造物で、今回のような公開セミナーをやるようになりました。

平成27年度はさぬき市の細川家住宅という、江戸時代中期に建てられた農家で実施しました。八十八ヶ所めぐりの88番札所の大窪寺というのがありますが、その近くです。去年は宇多津町。今日は教育委員会事務局の方が来てくださっていますが、宇多津町にいくつか文化財として指定されている建物がございますので、そちらで公開セミナーをしました。

去年、おとしは子ども向けだったんですけども、今年はこの建物を拝見して大人向けに何かできないかなと考えました。今年1月から、町教委や県教委ともご相談して、このようなセミナーを実施することになった次第です。本日は多度津町の教育長さんがいらっしやってくださいましたので、ご挨拶をお願いいたします。

田尾勝多度津町教育長

こんにちは。多度津町教育委員会の田尾と申します。どうぞよろしく申し上げます。今回は多度津町のこの地域、奥白方の林求馬邸で香川大学の公開講座が行われることになり、本当にうれしく思っています。

ちょっとだけ説明申し上げますと、多度津は江戸時代から京極藩の分家として丸亀藩から分かれて、今の場所であれば、この赤丸のところ、多度津港の近くの中と言われるところですが、そこを中心に陣屋が形成されて、そこが多度津町の政治の中心であったわけです。その最後の六代目の藩主高典さんの、明治に入る前、江戸の最後の藩主ですけれども、その藩主の時代、国の情勢からいうと外国のさまざまな艦隊が近づいてきておったわけです。そこで、防衛の意味も含めて、この奥白方の地に別邸等をつくろうということで、家老である林求馬の屋敷をこの地につくった。北には黒藤山、そして出られて黒戸山、そして弥谷、天霧、南と西と北が三方山に囲まれて、東の出口だけが多度津に向かっておるといふ形のところ、ちょうどこの赤丸のところです。ですから、この地を見ていただいたら、当時の状況等、あるいはこの地になぜ建てられたかということも読み取れるんじゃないかなと思います。

この奥白方の自然や景観も感じながら、落ち着いてと言ったらなんですけど、この公開講座を受けていただいたらありがたいと思います。しっかりと奥白方の自然とか、景観とか、歴史とかいうのを味わいながら、勉強していただけたらと思います。本日は多度津町、また奥白方においでいただきまして、ありがとうございます。

諸連絡

それでは、最初に配布資料を確認させていただきます。こちらですね、ファイルに挟んであるものが一つあります。それから、それとは別に配られた資料がありまして、1枚ものですね。自由民権運動と書いてあるカラーの刷り物で、片面印刷のものが一つ。それから、アンケート、以上、お手元にありますでしょうか。大丈夫でしょうか。

今日の流れですが、このあと3時までとなっております。途中で1回休憩を取ります。畳の部屋でお暮らしになっている方はどうってことないかもしれないんですが、畳の部屋がなくて、普段あまり正座してないという方も、中にはいらっしゃるかと思います。どうぞ足は崩して下さって全然構いませんので、リラックスしてお聞きになっていただければと思います。前半では私ども三人がそれぞれ20分ずつぐらいお話をさせていただき、休憩を挟んで、その後は皆さんも交えてディスカッションをしていこうと思います。このような流れで進めてまいります。

あと、お手洗いの場所ですが、大丈夫でしょうか。方向でいきますと、向こうですね。この建物の向こう側の建物の奥にございますので、もし途中でお手洗いにいきたいという方は、行かれて下さって構いませんので、そのときはそっと抜けて行っていただければと思います。そんなに堅苦しい会ではございませんので、どうぞリラックスしてお話を聞いてください。

もう一つ、こちらの記録のために、写真を時々撮らせていただきます。皆さまの顔が写ることは多分ないと思いますが、後ろから撮りますので、後頭部は写っちゃうかもしれないですが、よろしいでしょうか。どうしても嫌だという方、おっしゃっていただければと思いますが、記録のために写真を撮らせていただきますということです。あと、同じく記録のためにICレコーダーで録音もさせていただきますが、皆さまのお声が出るとかそういうようなことはございませんので、ご安心ください。

報告1. 東洋の学問から、西洋の学問へ

山本 珠美（香川大学生涯学習教育研究センター）

それでは、早速、「報告1. 東洋の学問から西洋の学問へ」を、お話をさせていただきます。資料はこちらのほうの3枚目、1枚めくっていただいて、表紙の裏側も私のレジュメになっているんですが、前に出ているスライドと同じものが3枚目から出ておりますので、そちらのほうを見ながらお聞き下さい。全く同じものなので、前に書いてあることはメモしなくても大丈夫です。

私からは三つお話をさせていただこうと思います。この建物ができたのが、1867年、今からちょうど150年前です。明治維新がいつ起きたかという1868年なので、明治維新が起こる直前、本当にこれから戊辰戦争勃発しますよ、の直前のときに建てられたという建物です。ご存知のとおり、明治維新を境に日本の社会は大きく変わります。政治体制が変わったことが一番大きなところではあるかと思いますが、このお宅、あちらのほうに弘濱書院という私塾も復元されておまして、まだご覧になっていない方は、あとでご覧いただければと思いますが、ここの林家というのは学者の家系だった。その学問の体制というのも、明治維新を境に大きく変わります。

どういうふうに大きく変わっていったのか、これから三人の人物に焦点を当ててお話をさせていただきますが、一人は佐藤一斎です。江戸時代の最高学府、「佐藤一斎と昌平坂学問所」と書いてあります。佐藤一斎という方、名前聞いたことある方はどのぐらいいらっしゃいますか。ポツリポツリですね。ありがとうございます。この方ですね、実はこの建物に書が残っているんです。残念ながら手を挙げる方は少なかったんですが、江戸時代末期の大変有名な教育者です。

この方、かなり長く生きた方だったので、お弟子さんもたくさんおりました。今だったら誰が有名な学者として、皆さん思い浮かびますでしょうか。京都大学の山中先生とか、そのあたりが有名ですよ。それぐらいと言ってもいいと思うんですが、とっても有名な先生だったということで、ぜひこの建物ともゆかりがある方ですので、お名前覚えて帰っていただければと思います。

それから2番目、東京大学誕生。日本の国立大学として最高学府が明治になって新しくつくられるわけですが、星新一という作家さんいらっしゃいますよね。ショートショートで有名で、お読みになった方も結構いらっしゃるんじゃないかと思うんですけれども、星新一のおじいちゃん、小金井良精という方に焦点を当ててお話をしていこうと思います。

それから3番目。もう一つの大学ということで、今はもうない、ないというか東大に吸収合併されてしまったというだけなんで、今でも残っているんですが、東京大学が明治10年に建てられたのと同じ年、明治10年にもう一つ別の大学ができるんですね。工部大学校と言います。日本がパナソニックだとか、ソニーだとか、トヨタだとか、製造業で非常に世界をリードする立場になれたのは、実は東大じゃなくて、このもう一つつくられた工部大学校が大きかったと言われたりもしますが、そのお話です。その話をするときに欠かせないのが伊藤博文です。伊藤博文は皆さんご存知だと思いますけれども、彼ら三人の人物に焦点を当ててお話をしていこうと思います。

では、佐藤一斎、この方です。この絵、重要文化財として指定されておりまして、本物がどこにあるかと言いますと、上野の東京国立博物館にあります。この画像はどこから取ってきたかという、東京国立博物館のホームページです。ホームページを見ればいつでも見ることができますね。渡辺崋山が描かれた絵ということで、これ、上のほう、ちょっとカットしちゃったんですが、上のほうには書が書いてあります。書があって、その下にこの肖像画があるのですが、この方が江戸末期大変有名な教育者でした。

1772年生まれで、1859年に亡くなっております。長生きですね。90近くまで生きていらっしやった。昌平坂学問所で教えた儒学者とあります。昌平坂学問所というのは、江戸時代の最高学府と言っていいかと思えます。今、東京にお茶の水という駅があるんですが、東京医科歯科大学のキャンパスがあるところ、あのあたりにあったと言われております。

『言志四録』という本がありまして、この本は西郷隆盛の座右の書と言いますか、愛読書と言われていた本の一つなんですけれども、この言葉、大変有名な言葉でして、漢文で書いてありますがちょっと読んでいきますと、「少くして学べば、即ち壯にして為すことあり」。つまり若い頃、子どもの頃に学問とか勉強すれば、大人になってから何か為すことができる。「壯にして学べば、即ち老いて衰えず」。中年になって学べば、学習を続けていけば、年を老いてからも衰えない。さらに、最後すごいですね。「老いて学べば、即ち死して朽ちず」、名が残ると。要は人間一生勉強しましょうということなんですけど、この言葉、各地あちこちに実は碑が残っておりまして、この近くで言いますと、香川県内は知らないんですけども、岡山県に行きますと、岡山県生涯学習センターという建物がありまして、そこに行くとその文字がどーんと飾られています。まさに生涯学習だぞというようなことを言ったものなんですけれども、この言葉が有名な言葉として残っております。

佐藤一斎は地方地方の学者たちとの交流もあったということで、だからこそこにもその書が残っているということになるわけです。

さてちょっと細かい字で申し訳ないです、見にくいかもしれないんですが、皆さまのお手元にもありますので、そちらのお手元で見ていただいたほうがいいかもしれません。昌平坂学問所ってというのがここにありまして、これ図は明治維新を境にして、左が江戸時代の学問所、それから右が明治の学問所ということなんですけど、昌平坂学問所はとにかく当時の最高学府なんですけど、何を学んでいたかという儒学なんです。儒学というのは、要は中国から来た学問ということになるわけなんですけど、それを学ぶ学校だった。それとは別に天文方とか種痘所ってというのがあって、これ実は名前がコロコロ変わっていったんですけど、詳しいことは書いてないんですけど、天文方は、要は洋学。鎖国をしていましたが、長崎だけは開いてましたから、オランダからいろいろな本が入ってきてたんですね。オランダ経由で来たヨーロッパの学問というものを、研究していたわけです。一方で種痘所ってというのは、これは医学です。日本の医学というのはもともとは西洋医学ではなかったわけなんです。医学も、そもそも東洋から来たというか、中国から来てたんですけど、西洋の医学を学ぶところとしてこういったものもできていたと。

明治維新が起きて、これらの学問所はなくなったわけではなくて、そのまま明治政府が引き継ぎます。引き継いで東大にするんですけど、東大にするときに、この昌平坂学問所の系列というのは、実は閉鎖されます、廃止されてしまいます。ここは、要は真ん中のこのラインというのは東洋の学問を教えたところなんですけど、東洋の学問は廃止されてしまいます。

なんでかという、東洋の学問にも実は大きく二つの系列があるんですけども、儒学ですね、中国から来た学問を推しているグループと、日本固有の学問で国学というふうには言っていたんですけど、主導権争いをしてしまうんですね。内部抗争をしてしまって、その内部抗争が「もうお前らいいかげんにしろ」ということで、閉鎖され、廃止されてしまったと。一方洋学の系列です。天文方の系列と、種痘所の系列。天文方は大学南校に、種痘所は大学東校にと変わります。

南校だとか東校って、東の学校に南の学校ってあえて書くっていうことは、これは分校なんですよ、極端な言い方すれば。中央にあるのは、あくまでもこの昌平坂学問所の系列。東も西も、北も南も何も書いてない、ここが中心なんだけど、ここが漢学派と国学派で、喧嘩を始めてしまった。私と山本裕先生が日

本で生まれ育ったんですけれども、張先生は中国から来られた、お生まれになってる方ですが、ここでんかを始めてしまったということですよ。それでつぶされてしまって、残ったのが洋学。

南校は実はイギリス、アメリカ系、英語なんですね。英語を中心に勉強していた学校。医学はドイツが中心だったので、ドイツ語を中心に学んでいた。ここも実は結構危険だったんです。お互い疑心暗鬼があったんだけど、ひどいことにはならず、この上下がくっついて東京大学ができたということですから、もともと東大ができたときは、アメリカやイギリスやドイツや、そういったヨーロッパの学問を学ぶ学校として建てられたんだということです。この系列、なくなってしまった東洋の学問に対し、西洋の学問が残った、と。残って東大ができたということになります。ちょっとそれだけ覚えていただきたい。

次に星新一のおじいちゃんのお金井良精。もともと江戸期の生まれですので、藩校に入るんです。長岡藩なんなんですけれども、長岡藩の藩校に入るんですが、長岡っていうところは朝敵なので、新政府軍にコテンパンにやられてしまうんですね。で、逃げていくわけですよ。仙台のほうに逃げていく。若い頃は結構苦労をされるんですが、藩校で学ぶどころじゃなくなっちゃった。

明治維新になって、それでも優秀な方だったんでしょう、最初大学南校に入る。英語を勉強するということが大学南校に入るんですが、理由はよく分からないんだけど、退学させられちゃうんですね。この理由は分かってないということなんです、その後大学東校という医学のほうに入り直して、それで後には東大医学部の学部長にまで上り詰めたというような方なわけですよ。お顔がこれですよ、この方。星新一のおじいちゃん。母方なんです、母方のおじいちゃんも東大医学部の学部長まで務めた方、長く医学部の先生をされた方です。こういうような経歴になっております。安政5年生まれですので江戸末期だったんですが、結構長く生きていらっしゃるんですよ。医者の不養生という言葉もありますが、小金井良精はかなり長生きをされてる。

『小金井良精日記』というものがあって、この方はものすごい詳細な日記を残しています。それが一昨年から昨年にかけて出版されたということで、当時の大学の先生の生活というものがこれを読むとよく分かる。おもしろいのは、よく下痢になってます。ごめんなさい、汚い話で。そういうようなことまで書いてるんですね。あとはボートが好きだったんですね。よくボートに乗っていて、昔東大ができたばかりの頃、春にボートの大会をするっていうのが、東京の町の風物詩になっていたというのがあります。それは学生だけじゃなくて、教員も出てたんですね、教員の部というのがある。ボート大会の前になると、毎日ボートに乗っている。一体いつ仕事してたんだろう、みたいな。別に休みの日だけじゃなくて、月火水木金と、やたらボートの練習、ボートの練習というふうにして書いてあって。星新一のおじいちゃんっていうだけではなくて、当時の明治の頃の学者、知識人がどういう生活をしてたのかというのが、この日記を読むと分かる。ただ、日記を読むのはなかなか大変です。結構分厚いものが4冊ありますので大変なんです、星新一のこの本『祖父・小金井良精の記』ですね、これは1冊の本としてまとまっておりますので、もし興味のある方はお読みになっていただければと思います。

そして最後にもう一人、伊藤博文。今日のメンバーを見ますと、千円札が伊藤博文だった時代をご存じの方々ばかりですよ。20歳ぐらいの学生だと、伊藤博文が実は千円札だったということを知らないんですが、この顔はおそらくほぼ毎日のように眺めていた顔ではないかと思えます。伊藤博文という方は皆さんよくご存知なわけで、あまり説明する必要はないと思うんですが、何と云っても日本の内閣総理大臣を4回も務めた方です。もともとは、萩の下級藩士だった方。吉田松陰に師事していて、松下村塾に若い頃学んでいた。尊王攘夷運動に身を投じたというようなことが言われるわけで、その後明治になって政治家になって、総理大臣にまでなったという人です。

吉田松陰は、よくNHKの大河ドラマとかにも出てくるのでご存知だと思うんですけども、密航しようとしたことがあったんですね。密航しようと思ったんですけども、捕まっちゃった。それで捕まって、獄に入れられて死んでしまったということですが、先生ができなかったことを、伊藤博文はやっているんです。

皆さんご存知かどうか、あまり語られてないことのような気がするんですが、伊藤博文は密航したんです。成功したんです。どこに行ったかという、ロンドンに行ったんです。ロンドンに行って、そこで工業力というものをまざまざと見せつけられるわけですね。当時のイギリス、大英帝国です、ものすごい繁栄してます。鉄道が走ってます。「うわー、なんだこれは」みたいな。見たことないですよ。そのときに、とにかく人材育成が必要だということを強く感じた。一緒に密航したのが全部で5人です。伊藤博文も行きましたが、伊藤博文だけではなくて、残りこういった方々。全員長州の下級藩士たちです。この人たち「長州ファイブ」と言われているんですが、ロンドンに留学に行きました。

この話、映画になってるんですけど、ご覧になった方いらっしゃいますか。『長州ファイブ』っていう映画。いらっしゃいますね。これ、私授業でよく学生に紹介している映画なんですが、TSUTAYAなどで100円で借りられますので。インターネットをおうちでやられる方であれば、時々無料で1ヶ月間ぐらい見られるときがありますので、ぜひご覧になって下さい。見ていただくと、伊藤博文を始め、若い長州藩士たちの成功した密航留学が分かりますので。

それで、この長州ファイブのうち、右側の二人ですね。伊藤博文は政治家ですが、手前側に山尾庸三という人がいます。この人はあまりご存知ない方がいらっしゃるかもしれませんが、この二人がスコットランドから人を呼んで学校を作ります。ロンドンじゃなくてスコットランドなのは、山尾庸三はロンドンに留学した後、スコットランドのグラスゴーに行きますので、そこから人を呼んでつくった学校が工部大学校と言われる学校で、これが今の東京大学工学部の前身。この学校が要はスコットランドの学校体系を導入した。スコットランドって当時産業革命の中心地でもあったわけです。今は衰えかけているというか、大分前から大英帝国斜陽ですけども、当時はスコットランドが工業の中心ということだったので、グラスゴー大学の先生を呼んで、東京大学工学部をつくったと。

まとめますが、この図ですね。もともと江戸時代はこの昌平坂学問所の流れ、「東洋の学問」が日本では中心だった。ところが、この系列がなくなってしまって、英米系、それからドイツ系の洋学・医学が中心になって、工学部のない東京大学ができた。同じ年にスコットランドから人を呼んで、工部大学校という工学の大学をつくった。最終的にこれらが一緒になって帝国大学になるんですけども、いずれにしてもここは完全に西洋の学問を学ぶ学校としてつくられていったということです。これで大体20分ですが、東洋の学問から西洋の学問へという流れ、ご理解いただけたのではないかと思います。

では、こういった大きな流れがそんなに簡単に日本人に受け入れられたのかどうかというと、受け入れられた部分があれば、あまりに変化が急過ぎて追いついていかなかった人たちもいたわけです。そのあたりのことを次の山本裕先生にお願いをしたいと思います。

報告2. 近世から近代へ

～「ウェスタン・インパクト」と近代日本社会、その受容と「反発」～

山本 裕（香川大学経済学部）

ただ今ご紹介いただきました、香川大学経済学部の准教授を務めております、山本裕と申します。

私が本日お話し申し上げるのは、「近世から近代へ—「ウェスタン・インパクト」と近代日本社会、その受容と「反発」—」と題することについて、お話させていただきます。

タイトルは「近世から近代へ」ということなのですが、徳川幕府が終わる頃に、幕末開港を迎えます。1853年、アメリカのペリーが黒船4隻で東京湾の、神奈川県今の浦賀というあたりにやってきました。それによって、日本はいわゆる鎖国というものが終わります。実際鎖国というのは、昨今の見解についてみれば、ヨーロッパであればオランダ、そして中国、朝鮮王朝とは連絡を密に取っていたわけで、本当に何もかも閉じていたわけではなかったという意見が主流となっております。ただ大々的な交易をやっていたわけではなかったことも、また事実でありました。「鎖国」の状況が一転して、ヨーロッパ、アメリカの文化、文物が全部入ってくるという状況、そしてその後徳川幕府は崩壊し、新しい時代、いわゆる明治維新へと移ってまいります。

このように、近世から近代へと時代が転換する中で、当時の人々はどのように生き抜いたのでしょうか。つまり、激動の時代をどうやって人々は渡り行こうとしたのか、あるいは泳いで行こうとしたのか。そういった先人たちの人々の歩み、軌跡のようなものを、ここではちょっとコンパクトにいくらか申し上げようかなと思います。

本報告では、いわゆるウェスタン・インパクト、黒船がやってきた後の変化をこのような表現で説明いたします。西欧の文物・文化がワットと入ってくるような状況、すなわち、西欧近代からの衝撃を、学問と学問体系に裏付けられた価値観に着目して、それらを受容しようとした人々の諸相を考察します。もちろん、本当に受容できた人もいれば、諦めちゃった人もおり、反発する人もおり、さまざまな人間模様がそこにはあったということです。そのような人々の姿を本日は若干見ていこうかなと思います。

構成ということで、第1節「近世から近代への移行と人々の行動」という所では、自由民権運動に着目して、お話しいたします。

2番目は「近代日本社会における教育システム」です。西欧由来の普遍的価値観を身体化しようとした人々です。例えば、学校に行く、時間は守るといったこともそうです。私の大学のゼミの学生が卒業論文で書いたんですけども、彼はゼミで勉強したいことについてこんなことを言ったんです。「先生、なんで遅刻しちゃいけないんですか」「良くないよね、それは当たり前だよ」「でも僕サッカー部なんですけど、5分前集合に遅刻したらすごい怒られました」怒られるのが私たちの当たり前の価値観なんですけども、でも例えば江戸時代、5分前集合という概念はそもそもあったのでしょうか。江戸時代は約2時間に一度撞くお寺の鐘とか、お寺の鐘を4分割する30分ぐらいの時間感覚はあっても、5分という概念はまだなかったのではないだろうか。とすると、きちり時間通りに行う集団行動というのは、明らかに近代の産物、明治以降の産物と言ってよいのではないのでしょうか。そういうようなことも含めて、あるいは学校で学んだことで自分が立身出世していく、様々な西欧的な価値観を身体化しようとした人々の話をしてまいります。

3番目は小括として、ただ今申し上げましたような時間は守ろうというような、あまりにも当たり前過ぎますが、こういう「当たり前」の価値観・制度、その来歴と人々への「拘束」あるいは「反発」、そ

ういったことについて見ていきたいと思います。

主要登場人物について申し上げます。まず、福沢諭吉。近代日本の啓蒙家であり、教育家であります。続きましては、板垣退助。近代日本の政治家です。そして、その時代を懸命に生きた当時の若者群像について、名前というよりもこんな人たちが、こんなことをしようとしていたという、集団で見たいこうと思います。これらに注目しながら、近代日本社会における学問と、それをめぐる諸問題について考えていこうと思います。

「近世から近代への移行と人々の行動—自由民権運動に着目して—」という第1番目のテーマです。近世日本社会ってなんだろう。江戸時代、侍、いろいろ表象的なイメージは浮かびますけれども、ちょっと勉強っぽいキーワードで言いますと、幕藩体制とか、あるいは身分制社会なんていうのがよく用いられております。幕藩体制っていうのは何かと言いますと、幕府と藩、この多度津でしたら江戸時代は丸亀京極藩の分藩で石高が1万石だったことで知られています。こういう大名というのは、大名の下に侍が仕えることを封建的な主従関係と言います。米などを現物で納めさせて年貢とする石高制が基礎になっています。

封建制という言葉を手簡単に説明しますと、上位の君主が臣下に対して、その領地支配を認めて爵位を与える、臣従、貢納とか軍事奉仕を義務付ける社会制度でありました。つまりかなり身分秩序が確立された社会というのが、近世という時代でした。この近世身分社会の身分構造で申しますと、実は侍、武士っていうのは、家族、奥さん、子ども、そういった全部をひっくるめて7%ぐらいしかいませんでした。逆に農民階級、これは漁民も入れて90%弱おりました。圧倒的に農民が多かった。侍というのは本当に少なかった。そういう状況の中で、近世の身分制というのは、言うなれば一人ひとりの人間が身分的な社会集団というような袋の中にまとめられていたといえます。つまり農民は農民たちで、侍は侍たちで、そういうような形でまとめられて、支配者から集団を通じて付加される^{えき}役、と呼ばれる仕事や任務を果たすことが求められます。

ところが近世後期には、そういう袋に入りきらないような人々も、都市を中心に実は多数発生しておりました。例えば博打打ちのような正業に就いていない人々が、幕末維新の動乱で明治維新政府の側について戦ったり、あるいは旧幕府側について戦った、なんていうことも昨今の研究で明らかになっております。

福沢諭吉という人物はとても有名で、彼が残したさまざまな言葉が今日も知られています。そして、彼は晩年口述筆記による伝記を残しています。『福翁自伝』と言いまして、その本の中で彼はこう書いています。「門閥制度は親の敵で御座る」。実は福沢自身は現在の大分県中津藩の下級武士の生まれで、お父さんはすごい勉強家で学者でもあったのですが、いわく「つまらない中津藩の仕事」をずっとさせられて、学者としても名を残せなかった。福沢諭吉が1歳のときに父である福沢百助が亡くなります。不本意な父の生涯をもたらしたものも含めて、福沢は様々な社会に対する疑問を抱きながら成長していきます。さまざまなつてを頼って蘭学を学び、英語を学び、自ら塾を開き、そして幕府の派遣でアメリカにもヨーロッパにも行きました。そういった経験の一端を『西洋事情』という本で述べていますが、この本が出版されたのは1866年でした。

福沢の著作の中で最も有名なのは『学問のすゝめ』という本ではないでしょうか。全17編で大体340万部ぐらい売れたと言われています。当時の日本の人口が三千数百万人だった時代です。海賊版が山ほど出たって話もあるので、思った以上に読まれたり、誰かが持っているものをまた読ませてもらったり、書き写したりっていうことで、広く膾炙していったというふうに使われています。

自由・独立・平等という、それまでの日本人が知らなかった価値観が、新時代の社会を支配すると、この中で主張されています。有名な「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という文言を御存知の方も多と思います。つまり新時代における身分は、生まれではなく、学問を通じた個人の見識によるのだと。このことは、権威への服従を中心的価値としてきた封建社会の民衆像を否定して、自らが学ば学ばほど自らを助け、そして自らが社会を切り開いていくという価値観、または価値観への意識転換というものを促していったというふうに言われております。

徳川幕府崩壊後、明治維新政府の中樞を担ったのは、薩摩、長州、土佐、肥前に代表される西国雄藩の下級武士と公卿でした。

こういった彼らたちによって近代国家が目指されていきました。ここで課題となるのは、どのような近代国家をつくるべきなのだろうかという点です。いかなる国家モデルを選択するか。結果として選ばれたのが、明治新政府の主流派でありました、先ほどの山本珠美先生のお話にも登場した、伊藤博文ですとか、あるいは山縣有朋という日本の陸軍を創設した人物が主張した、プロイセン、ドイツ帝国モデルが採択されました。

ドイツは立憲君主制ですが、議会の権限が弱く、君主に大幅な権限を与えるという点に特徴がありました。ところが、選り取られなかったもう一つの道がありました。これは明治新政府の反主流派が提案したものでした。その反主流派の代表的なリーダーが大隈重信です。彼は佐賀藩の身分の高い武家の生まれで、漢学、儒学の素養があり、幕末には西欧の学問のキャッチアップをしていきました。しかし、明治新政府樹立後は当時の最先端の学問を摂取した若者たちが、大隈の下に官吏として付きます。

当時の若者はどうやって学問を摂取したのでしょうか。その多くは福沢がつくった慶應で学ぶというコースがありました。代表的な人物として、岡山出身で後に首相になる犬養毅。「憲政の神様」尾崎行雄、「三井中興の祖」中上川彦次郎、小野梓という人物は、実は早稲田を実質的につくった人物として、今でも小野記念館という形で、早稲田キャンパスの中に建物が残っています。

彼らが構想した国家像のモデルは、立憲君主制ではあるが議会の権限を強くして、君主は君臨すれども統治せずと言われたイギリスモデルでしたが、採択されませんでした。そして明治14年の政変という、1881年に起きた政府の中での権力争いで大隈が追放され、そして大隈と一緒に、大隈の下にいた慶應義塾出身の若い官吏たちも一斉に辞職します。

慶應という学校は、私が通っていた頃は民間企業に行くことこそが絶対で、官僚・役人を忌避する文化がありました。それは福沢先生由来の云々という話がありました。しかしこの話は嘘、作られた伝説です。慶應出身者は官僚になっても出世できないから、民間企業とか実業のほうに行かざるを得なかったということです。これが、いつの間にか「福沢伝説」になっていったということです。世の中には様々な伝説とか言い伝えというものがありますが、そのルーツを辿ればいかに生臭い話だったかということを、語らしめるようなものがあります。

自由民権運動の流れは、大体このような形で展開します。発生期は、明治初期の士族の動向や不平士族の反乱を踏まえる必要があります。この不平士族の反乱が1877年、明治10年の西南戦争で終焉を迎えます。武力蜂起は駄目だということから、自由民権運動はより活発化していきます。この自由民権運動の深層に潜むものとして、不平士族の反乱などが起きていた1874年頃に、民撰議院設立建白書提出と、それをめぐる論争が起きます。その論争などを見ると、江戸時代まで、近世社会までに確固としてあった身分制社会が解体されたことを前提に、どうやってこの日本社会をつくりあげていけばいいんだろうかということについて、かなり激しい議論がたたかわれます。

その一方で、自由民権運動のリーダーとして知られる板垣退助は、1877年に士族の反乱が収束したことから、ますますもって、武力で今の新政府の統治を武力で訴えて壊すことができなくなったということに気がきます。一方で、彼は軍事英雄とも評されていました。板垣退助は土佐藩の身分の高い武家の生まれで、戊辰戦争において板垣退助は司令官として大活躍します。彼の一番能力は戦争指揮能力だったという意見もあります。しかし、西郷ですら武力蜂起に失敗したということで、新たな領域で、つまり自由民権運動のような活動を強いられることになっていきます。

自由民権運動という言葉を私たちは知っていますが、その具体層についてはほとんど知らないことに気がさせられます。色々資料を調べますと、自由民権を鼓舞した演説の後には、アトラクションとして撃剣会という、チャンバラ的な剣劇や、試し斬りのショーを行っていました。自由民権運動の演説会ではお堅いものだけじゃなくて、しっかり楽しませるエンターテイメント的な仕組みまであった、なんていうことが、最近の研究で明らかになっています。

こういった自由民権の結社の運動と、撃剣会に集う都市下層部の人達の間には、身分制社会に代わる新しい社会を目指すというような共通点があった。つまり権利や自由といったお堅い話と、従来は侍だけが身に帯びる事が出来た剣を用いて行われたエンターテイメントショーの双方を受容する集団というのが明治初期に出来上がっていくこととなります。

国会開設の勅諭は、1881年、明治14年の秋に出ますが、これは自由民権運動の側からすればショックな出来事でした。なぜならば、政府の側が議会を創設すると宣言することで、自由民権運動をもって政府と対抗しようとした彼らは、自らの手で国会をつくるという運動目標が浮いてしまいます。その結果、新たに結成された自由党による政党活動へと、運動自体が狭められていきます。しかし狭められた運動だけで本当に良いのだろうか考える人達は、成功の可能性の低い武力に訴える方向をも視野に入れ始めます。

ただ、自由党による政党活動の中で、西欧近代を扱った書物で知識を深めた人々が、自らの力で憲法草案をつくり出していったということも、またよく知られています。特にこの40~50年ぐらいの研究成果で、東京の西部、農村地帯だった五日市というところで、当時の若者だった千葉卓三郎という人物が、かなり人権保障に厚い内容を盛り込んだ私擬憲法、五日市憲法と今日言われているようなものをつくりあげたことも、昨今知られております。自由民権興隆期における社会経済状況の変動について考えれば、こういった自由民権運動を精力的に活動していく上で、日々の生活に余裕があるからこそ邁進できるという側面があったことを見逃すわけにはいきません。

しかし、余裕があるはずの日々の生活が、一点、脅かされる動きというものがちょうどこの頃発生します。当時の財政担当者である松方正義によるデフレ的財政政策が施行されます。その結果、物価下落が発生しました。当時日本社会で圧倒的な人数を占めていた農民たちは、江戸時代までの米を物納する形から、明治時代に入って、所有する土地の地価に基づいて毎年決まった金額を納税するようになりました。デフレ状況で固定された金額を納税するというのは、実質的な負担が増します。そのような状況の中で、徐々に納税できない農民たちが現れます。そういった彼らは土地を担保に借金するんですけども、返済ができないと担保である土地が取り上げられます。そういう担保流れの土地が増加した結果、農地の価格は下落します。その一気に下落した農地を富裕層である地主たちは大量に安く手に入れます。そして農地を担保流れで手放した農民たちは、農業労働者、すなわち小作人になります。とすると、圧倒的多数の農業労働者である小作人が生まれる一方、安くなった大量の農地を取得した、もともと豊かだった地主がさらに豊かになっていきます。つまり格差の拡大の固定化という近代日本の特徴が、実は自由民権運動が盛んになり続ける一方で起きていたという側面がありました。

自由民権運動の激化の状況は、皆さんにお配りした1枚の資料に記載されている日本列島の図のところに描かれていますので御覧ください。しかし、図で示された自由民権運動の勃発状況を見ましても、なかなかイメージが湧きにくいことも事実です。そこで、福島県の会津地方にいたある兄弟の話を中心に盛り込みました。三浦信六と三浦文治という、今日ではほとんど無名な二人です。

なんでこの人を取り上げるかという、結論から申し上げます。私の母方の祖父の、そのまた母方の祖父である高祖父が三浦信六さん。その三浦信六さんの妹と結婚して婿入りしたのが三浦文治さん。二人は義理の兄弟になります。信六さんは会津地方の名望家で地主でした。そして三浦文治さんは自由民権運動激化事件の一つとして位置づけられる、加波山事件に参加して処刑されます。

一方三浦信六さん。地主で、しかし自由民権運動にも精力的に取り組んだ彼は、第1回の衆議院議員選挙に当選します。しかし第1回の帝国議会の最中に政府側の方向に寝返った結果、第2回衆議院選挙で4票しか獲得できなくて落選しました。私の指導教員の、そのまた指導教員が書いた研究書でこの事実を知ったのでした。つまり何が合ったかと言いますと、1880年代ぐらいのある日本の地方の家では、兄弟がこれからの日本をどうすべきなのか、何が適切な行動なのかをめぐって、激しく議論するような風景もあったのだということを、私は祖父がその母親から、つまり三浦信六の娘だった祖父の母親から、口伝という形で聞いたことを今でも覚えています。

時間がないようなのでまとめます。ポスト身分制社会を自分たちの手でつくることを目指した運動が自由民権運動でした。そして、政府と民権派の対抗関係ってというのは、本来は来るべき社会の構想をめぐる競争であったはずなんですけれども、結論から申し上げれば、来るべき社会をつくる担い手、誰が主導権を取るのかという問題へと矮小化してしまった側面がありました。

民権家たちのその後としましては、実は国内での展望を失った民権家が、東アジアに打って出るというような事件も起きました。これは、その後の近代日本社会の一側面である、「内に民権主義、外に帝国主義」、つまり日本がアジアのリーダーとなり、軍事発動も辞さず、武力も辞さずという帝国主義的な部分を含むような、この民本主義的な源流というのが、実は自由民権運動の後継的な部分で存在していたのではないとも言えます。

「近代日本社会における教育システム」ということで見ていきますと、近世と近代を社会統治の観点で比較しますと、近世日本社会というのは、武士による世襲制であったことが一番の特徴です。侍の家が代々、まさに本日の会場である邸宅の所収者であった林家も多度津藩の家老職を務めていました。もちろん家を継ぐということは、それにふさわしく学識・見識を深めていく必要があるのですが、可能性としては無能であっても家さえ継げばそれでよし、ということもまた否めないものであります。ところが近代日本社会は、明治初期の時代を除くと、高等教育機関で学んだ学生を中心とした官吏採用試験の合格者が、国家行政をつかさどりました。生まれの階層は問わない。まさに先ほどの福沢の『学問のすゝめ』的世界観っていうものが、ここで当たり前になってきます。

でも近世においては、それは決して当たり前じゃなかった。近世を越えて、ようやく、高い学力によって担保された能力によって高い地位の獲得が可能となる。これを可能にしたのが明治期の高等教育システムで、先ほどの山本珠美先生がおっしゃったことと重なりますが、東京大学が1886年、帝国大学になりました。文・法・理・医・工という各大学校で出発し、農科大学校が加わります。実は20世紀に入って、第一次大戦が終わってからやっと経済学部ができます。以下帝国大学は、京都、仙台の東北、福岡の九州、北海道、の次は、朝鮮半島の京城、ソウル、台湾の台北、以下大阪、名古屋という順番で認められていきます。つまり大日本帝国は日本列島だけで完結しなかったというのが、帝国大学システム、高等教育機関

のシステムとも言えるわけであります。

もう一つは法学系の私立学校っていうのが設立されていきます。専修学校、後の専修大学です。東京法学校は法政、明治法律学校は明治大学、英吉利法律学校は中央、日本法律学校は日大、などなどです。そして一方で政治経済学を主体とする私立学校として、東京専門学校、先ほどの小野梓、大隈重信がつくった早稲田大学、洋学塾がルーツの慶應は、1858年が自らの設立年であるとしています。よく慶應・早稲田が私学の雄と言われる理由は、実はこの明治期のさまざまな私立学校のうち、慶應と早稲田だけが当初より専任の教員を置いていたんです。逆に言うと、専修、法政、明治、中央、日大等の学校群は、当初はみんな掛け持ちで教えていたと言うんですね。だから、慶應と早稲田の地位っていうのはある種、今でいう偏差値だけじゃない部分の特有性があったというふうに使われています。これら高等教育機関は、1920年の大学令で国家が認める大学になります。

もう一つ官立実業系の専門学校の動向として、一橋大学、大阪の大阪市立大学、神戸大学のそれぞれのルーツを一括りにした三商科大学と称された実業系の学校や、今の東京工業大学のルーツなんていうのも、また一方で出来てまいります。こういった高等教育を学ぶ若者の行動規範や精神的特徴として、教養の摂取というのがありました。大学に入る前の3年間の旧制高等学校では、徹底的な外国語教育が行われました。専門的な教育である、法学とか経済学とか、医学とか農学とか工学は全部大学でやればいから、その基盤となる外国語をとにかく勉強させるというのが一般的な旧制高等学校のカリキュラムでした。彼らは外国語の勉強を様々な文献を読んで行いました。加えて、単なる受験エリート、ペーパーテストをクリアして学校に入ったばかりじゃない自分たちの姿を見せるためにも、幅広い知識としての教養を摂取することがここで機能することとなります。

そういう状況の中で、様々な西欧古典への親しみが増えていくんですけども、1920年代以降には、社会変革をも視野に入れるようなマルクス主義に関する文献をも、西欧古典の一環として受容されるようになってきました。ところがこういった社会変革を視野に入れるような西欧古典を読んでいる彼らを取り巻く社会状況は、1920年ぐらいから米騒動とか、あるいは貧しい農村、貧しい都市下層住民に代表される社会問題というものが徐々に意識され始めた頃でもありました。そういうときに社会変革をも視野に入れる西欧古典を読んだ彼らは、マルクス主義文献等についてもより読解していくような形になります。しかしそれは遅くとも1930年代初頭には政府によって、読むことそのこと自体がタブーになっていく、弾圧されていくというような事態を迎えます。

しかし、政府が弾圧した頃の日本の社会状況を考えますと、経済的には金融恐慌、世界大恐慌が起きたあとの昭和恐慌がありますし、軍事的な選択肢としての中国東北部、満洲事変というのも勃発します。社会の様々な矛盾とかが出てきているけれども、社会の矛盾を扱う西欧古典の読解は禁じられていくという社会状況の中で、さて若者は何をしたのでしょうか。加えて一方で、この恐慌のあとには景気は回復しまして、より多くの人が高齢教育を学べる機会も増えます。具体的には実業系の、特にテクノクラート、エンジニア養成の学校がどんどん増えていきます。

高等教育を学ぶ同世代の割合が上昇するという状況の中で、しかし彼らはやっぱり他の人とは違うんだということをアピールするためには、幅広い知識を身に付けて、それを形にする教養を身に付けなければいけないという自己意識を強めていきます。でも高等教育を受ける学生そのものが肥大化していく中で、何を讀んでいいかわからない、どうやって生きていけばいいかわからないという話になります。このような状況下で、教養のマニュアル化というような状況にまで進んでいく事態となります。ただし、教養のマニュアル化が進む一方で、教養を深く身に付け人格を陶冶することこそが高い学歴を有する自己の責任で

あるという意識をもち、かつ、それをしっかり真摯に受け止めた人物の代表として、香川県では大平正芳という人物がいる、なんていうことをご説明することができるかと思います。ここで本来は、先に述べた教養のマニュアル化を進めた人物として、教養叢書の生みの親である、河合栄治郎という人の話をしようと思ったのですが、時間がありません。只今お見せしているスライドに、教養叢書をつくった東大の先生である河合栄治郎の写真と、教養叢書の表紙、そして一番右は、政治家になったあとの大平正芳が本を読んでいる写真があったので、載せてみました。

大変長くなりましたし、決められた時間をオーバーしましたけれども、一応簡単にまとめたことを申し上げようと思います。当たり前の価値観や制度、その来歴と人々の構図と反発を振り返れば、近世から近代へ移り行く中で、西欧由来の近代的な価値観を獲得した若者が、実践、例えば自由民権運動へと踏み出す者も多く現れたんですけれども、統治者たちによって挫折を強いられます。その後、近代的な統治者になるためには教育システムで学ぶことを所与の前提とする価値観が成立した社会の下、若者たちの一部は、進んで高等教育を学び、統治側の一員となることを目指していきました。そして彼らは単なる受験エリートではないことの証明として、教養を積極的に摂取するんですけれども、社会変革をも視野に入れた西欧文献の摂取は、統治者側から弾圧を受けることとなります。これは当時の若者たちにとって、ある種の挫折と言ってもいいでしょう。

そして弾圧後の社会で、教養は一部アクセサリー化へと堕してしまう側面も有してしまっていますが、それをしっかりと真摯に受け止めた人物たちもまた、高等教育を学ぶ中で一定数誕生します。彼らの中から、学生時代に摂取した教養で得られた知見、つまり、社会のリーダーとして、西欧由来の近代普遍的な価値観の浸透と実践に、生涯をかけて取り組む者も現れてきます。非常に知識人的な企業家、政治家の一部に、そういった彼らの真摯な生きる姿を見ることもできるんじゃないかと思います。

大変申し訳ございません、長々としたお話でしたが、以上で終わります。ありがとうございました。

報告3. 中国知識人の近代

張 曉紅（香川大学経済学部）

ご紹介いただきました、張と申します。私も同じく香川大学経済学部から参りました。香川県での勤務をきっかけに四国に居住するようになってから2年目です。今、いろいろと観察・体験しながら、この島について楽しく勉強させていただいているところです。私は中国の出身で、近代東アジアの研究をしていることもあって、ありがたく今回のチャンスを頂きました。

さて、今日は「中国知識人の近代」の話をさせていただきます。今回のセミナーは、「知識人がどのような葛藤の中で西洋の学問に向き合っていたのか」がテーマです。私が、魯迅、嚴復、梁啓超の3人の中国知識人を取り上げて、彼らの作品や人生の軌跡を通して、①中国近代の代表的な知識人がどのような葛藤の中で西洋の学問に向き合っていたのか、②そもそも、中国はなぜ西洋の学問に向き合う必要があったのか、について話します。

古代文明の一つとされる「黄河文明」をもつ大国——中国は、長い歴史と重厚な文化の蓄積があり、思想的には、諸子百家による「百家争鳴」の思想・文化の大繁栄の時代もありました。また中国は「聖人」とも呼ばれるほど偉大な思想家である孔子が生まれ育ち、世界に大きな影響を及ぼした儒学を生み出した国でもありました。儒学の教えが盛んだった中国は西洋の学問を、そもそも学ぶ必要はあるのでしょうか？

今日に立ってみれば、いかにもばかばかしい質問のように思われますが、近代の黎明期においてはこの考え方を持つ人は決して少なくありませんでした。しかし、一部の知識人は違っていました。清王朝の末期に、西洋諸国のアジアへの「積極的な」接近をきっかけに、知識人は西洋に目を向けるようになりました。彼らは使命感を持って海外にわたり、帰国したら中国における西洋の学問の伝播に尽力しました。彼らの目的はただ一つ、「救国」でした。

近代に差し掛かるときに、日本を強国にするために、日本の知識人は積極的に西洋から「近代」を学びました。中国の場合は、国内状況や国際環境がより深刻で、崩壊すら可能性がありました。知識人を中心とする有志は、「救国」を目的とする近代化を試みました。

中国では、「近代」という時期設定は一般的に1840年のアヘン戦争から1949年の中華人民共和国（新中国）の成立までの時期を指すことが多い。中国にとって、「近代」という時代の特徴はなんでしょう。一般的なイメージでは、近代中国は、国内はアヘンによる中毒者が多く、封建的礼教制度が民衆の思想に根強く残っていました。対外的には不平等条約を結び、領土が分割され、瓜分かぶんの危機に面していました。もちろん、近代は反封建・反植民地運動などの民族運動が昂揚し、様々な新しい社会の構成要素が生れ成熟していく時期でもありました。

清朝末期の中国についていえば、この時期の中国を例える言葉に「東亜病夫ドンヤービンフー」があります。アヘン中毒によって気力を失った人々、纏足で社会進出できない女性たち。中国の民衆が健康とは言えず、病態でした。日清戦争で清は日本に負けました。両国の戦いで本当に勝負しているのは軍事力ではなく、国力、士気だとの戦争から我々は学びました。病的な民衆を抱え、腐敗政治の清王朝、対、明治維新を経て帝国主義国にのし上がろうとする日本、勝ち負けはたいてい想像がつくでしょう。

さて、本題に入りましょう。まず、代表人物の一人、文学者の魯迅についてです。魯迅は、中国ではもちろん、アジアを中心に世界においても知名度の高い人物です。日本の中学国語教科書に魯迅の「故郷」が採用されるほど、彼の文学を日本では高く評価されています。また、魯迅は日本との関係が深く、日本留学の経験をもち、日本人の友人も多い。留学時代の日本人恩師を描いた作品『藤野先生』もよく知られています。

魯迅に関して、「棄医従文」（医学を捨てて文学に従事する）のエピソードが有名です。魯迅の「自序」によれば、彼が幼い頃、父親は病気にかかり、適切な治療を受けられず亡くなりました。それを機に、医学の道に進むと志し、日本に留学しました。卒業する暁に、国に帰って、父親と同じような、病気で苦しんでいる人を、西洋医学を用いて救おうという夢を持っていました。しかし、一つ偶然な出来事は魯迅の運命を変えたのです。

留学中のある日、講義が一段落してまだ時間があつたので教師は風景やニュースを映して学生に見せて、時間を埋めました。ちょうど日露戦争の最中で、戦争関係のスライドがわりと多かつた。ある時、魯迅は思いがけないスライドでショックを受けました。

「まん中に手をしばられた男、それをとり囲んでおおぜいの男、どれも体格はいいが、無表情である。解説では、しばられているのはロシア軍のスパイを働き、見せしめに日本軍の手で首を切られるところ、とり囲んでいるのは、その見せしめの祭典を見に来た連中であつた」（「自序」魯迅作・竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記 他十二篇（呐喊）』岩波文庫、2016年、9頁）。

縛られ首を切られるのを待っている男は中国人、とり囲んであの男を見に来た連中も中国人です。中国の土地で日本とロシアが戦争し、殺されるのも中国人、見物しているのも中国人、というわけです。その時に魯迅は思いました。「医学などは肝要でない」。「愚弱な国民は、たとい体格がよく、どんなに頑強で

あっても、せいぜいくだらぬ見せしめの材料と、その見物人になるだけだ。病気にしたり死んだりする人間がたとい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。むしろわれわれの最初に果たすべき任務は、かれらの精神を改造することだ。そして精神の改造に役に立つものといえば、当時の私の考えでは、むしろ文芸が第一だった。そこで文芸運動を起こす気になった」（「自序」魯迅作・竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記 他十二篇（呐喊）』岩波文庫、2016年、9-10頁）。

魯迅はこのように、医学生として勉学の道を途中でやめて、文学を学び始めました。その後、救国のために優れた文学作品を世に送り続けました。数多くの作品の中で、今回取り上げる『呐喊』は彼の代表作の一つで、1918年から22年の間に創作された短編小説集です。「呐喊」とは、戦場の突撃する兵士の叫び声を表す言葉ですが、魯迅は、暗闇の中にある中国社会に、高い一声をあげることによって国民に目覚めさせようといった動機のもとで名付けたものです。

小説集から、「故郷」と「薬」の2作を選んでみていきましょう。

「故郷」は1921年に発表されたもので、1919年12月に魯迅が故郷・紹興に戻って、母親など一族を北京に連れていく際の経験を題材にしたものです。主人公の「私」はかつて地主でしたが、家が没落して、財産を引き払うために、20年ぶりに故郷に戻ってきます。20年ぶりの故郷は変わったのか、変わらなかったのか、「私」自身もよくわからない。ただ、「私」の思い出の中で美しかった故郷はすっかり色あせていたことだけは確かです。

荷づくりがほぼ終わる頃に、少年時代の親友——閩土が来てくれると聞き、「私」は嬉しかった。閩土は昔「私」の家の雇人の息子で、楽しい遊び仲間でした。「私」の脳裏に少年時代の思い出が、蘇ってきます。少年閩土は、夏のスイカ畑で「^{チヤア}瘡」という小動物の捕まえ方を伝授してくれる、活気の満ちた、「私」の憧れの兄ちゃん的な存在でした。

そして、閩土が来ました……。

「その閩土は、私の記憶にある閩土とは似もつかなかった……昔のつやのいい丸顔は、いまでは黄ばんだ色に変わり、しかも深い皺がたたまれていた……その手も、私の記憶にある血色のいい、まるまるした手ではなく、太い、節くれ立った、しかもひび割れた、松の幹のような手である」……。なによりも「私」を驚かせたのは、閩土の口から出た「旦那さま！……」という言葉でした。少年時代の遊び仲間「旦那さま」と呼ばれた「私」は、「身ぶるいしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を距ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった」（「故郷」魯迅作・竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記 他十二篇（呐喊）』岩波文庫、2016年、93-94頁）。

ごく短い描写で、魯迅は大人になった「私」と閩土の間の身分制度によって生じた隔たりの深さをリアルに表現しました。この「封建的身分制度」は近代社会の重要な構成要素である平等な人間関係や自由・民主思想の構築の足かせとなり、中国社会の近代化を妨げる存在であったと、魯迅は考えています。

「薬」についてもみてみましょう。「故郷」と比べると、「薬」は血腥さを感じさせる作品です。主人公は革命家「夏瑜」（辛亥革命家・秋瑾をモデルとしている）と、同じ町に住み茶館を営む「華老栓」の2人です。夏は政府に捉えられ処刑されます。そして、華は夏の血に浸した饅頭を処刑場に買いに行きます。なぜ人間の血に浸した饅頭を買うのかというと、華は結核を患っている息子がいて、血に浸した饅頭を食べると結核が治ると聞いたからです。

華は首切り屋から夏の血に浸した饅頭を買って、茶館で息子に食べさせました。仕事を終えて首切り屋も一息入れようと思って茶館にやってきます。他の客も混じえた茶館での会話を魯迅は丁寧に描きました。そこでは、官のために働く人物（身分が高い）の象徴として首切り屋の言動や、革命家・夏の「この

大清帝国の天下はわれわれみんなのものである」という発言をまったく理解できず、きっと夏が「気が狂ったんだ」と「さとった」普通の民衆の愚昧などを見事に描かれています。この作品は「薬」という題名です。しかし、本文の中で、一度も「薬」という文字が出てきません。この「薬」をどう理解すべきでしょう。

血に浸した饅頭が華が息子に与えた「薬」です。しかし結局、この「薬」は効くことなく、息子は亡くなります。魯迅は、本当は、中国民衆の愚昧を治す「薬」、中国を治療する「薬」は何かを示唆しているように感じます。そう考えると、私は革命者の血はいつかきっと良薬となって、中国社会を前進させる力になると感じました。

魯迅の1910-20年代の作品を通して、中国社会秩序の根幹にある階級制、身分制、および民衆の愚昧に対する作者の痛烈な批判、「封建的礼教制度」こそ「東亜病夫」中国の病根であるというメッセージを発信しつづけていました。

魯迅は中国近代知識人代表の一人です。清末には魯迅のような留学経験をもち、外国で異質の文化や制度に触れ、近代国家を体験した知識人は数多くいました。知識人たちは窮地に陥った祖国のことで悩み、それぞれの救国の方法を探りました。そうした中で、西洋の思想を直接に中国に伝える人もいれば、一足先に西洋から学び近代化を実現した東洋の国——日本を経由して西洋の学問を学ぼうと提唱する人もいます。ここでは、代表人物を一人ずつ取り上げます。

西洋から直接に学んだ代表人物は嚴復です。嚴は中国に近代西欧の合理的思想を導入して、富強への道を開こうとした啓蒙思想家です。彼は1854年生まれ、1921年に亡くなり、まさに清朝末期、中国が存亡の危機に瀕した時代を生きた人物です。

嚴は少年時代に海軍学校で学び、その後、イギリス留学を経験します。日清戦争の敗北から衝撃を受けて、救国のための精力的な言論活動と西洋の近代思想著作を翻訳し、中国に伝える活動をするようになりました。彼の代表的な翻訳作品は、ハックスリーの進化論を翻訳した『天演論』です。同作品は実は本当の意味の翻訳ではなく、嚴自身の考えも多く書き入れたものです。彼は同作品のなかで最も力を入れているのは、「お互いに愛し合う、尊敬し合う」という道徳基準は人間の「本性」であるか否か、という議論です。原作のハックスリーの進化論によれば、進化論は自然に適合するが、人間社会には必ずしも適合しない。なぜかといえば、人間は道徳基準があり、お互いに愛し合う、尊敬し合う「本性」があるからです。しかし嚴はハックスリーの考え方に賛同しません。嚴は「お互いに愛し合う、尊敬し合う」ことは人間の本性ではなく、人間は集団生活を通して学び取った経験であり、まさに競争、優勝劣敗といった自然進化の結果だとみています（嚴復『天演論』上巻、注釈13）。

当時の中国で、人間社会も進化するものだという考え方を広げることは重要な意味を持つことだと嚴は考えます。弱肉強食という近代社会において、強国になるか、それとも諸列強によって瓜分される餌食になるか、それは自然選択の結果であれば、中国は弱い局面を打開するために、強くなるしかない。嚴は西洋の近代思想を活用し、近代中国の現状を踏まえて、救国は強国しかないという強いメッセージを発信しました。

もう一人の代表人物は梁啓超です。梁は日本経由で西洋を学ぼうとする人です。小説家浅田次郎の長編小説『蒼穹の昴』に主人公として登場する、科挙試験を見事に第一位合格者となった「梁文秀」という人物がいます。文秀は戊戌変法（百日維新）に失敗して日本に亡命しますが、この文秀のモデルは、梁啓超です。

梁啓超は中国では「国学大師」とも呼ばれる人物で、「新民」、「公德」、「教育」、「国家思想」などの近

代思想を中国で広げていくために多く貢献しました。梁は近代国家の建設における日本の実践——明治維新の事例を著作『日本国誌』を通して中国に紹介し、光緒帝に差し出した変法建議書の中にも、明治維新の実践内容を取り入れました。光緒帝によって押し出された戊戌変法は梁啓超が紹介した日本のモデルを大いに参考したそうです。

日本では、近代化のプロセスにおいて「和製漢語」、つまり欧文の新概念を日本人が自ら漢語に翻訳して使う言葉のことが、大量に生まれました。西洋の文字を用いた近代学問が素早く日本において伝播できたのは、和製漢語があったからといっても過言ではありません。

近代に入る前に、中国は西洋学問から学習することも多々あり、翻訳作品はいくつかありました。漢語に翻訳された言葉は日本にも数多く伝わりました。一方、近代に入って、和製漢語のように、日本で生まれた漢語表現が、中国に伝わるパターンもあります。日本ですでに翻訳されていた和製漢語を大量に中国に紹介し、中国での西洋学問の普及および近代概念を用いた高度教育に大いに貢献した重要なパイプ役の一人は梁啓超です。

他方、梁は「新民体」（古文から口語文にいたる過渡期の文体）という文体の創作と普及にも力を入れ、大衆に向けての文化活動の普及に重要な役割を果たしました。

このように、清朝末期から、中国の知識人たちが外国から近代思想および近代国家の実践事例を学び、中国に伝え広めることに尽力しました。彼らの影響を受けて、近代とは何か、近代国家とは何か、を真剣に考える若者が増え、変革を求める力が確実に増強しました。

しかし一方、魯迅の作品で明らかのように、1910-20年代前後の魯迅の故郷のような県城以下の農村地域（日本でいう「市」以下の行政地域）には、知識人たちの「新民」やら「国家」やらの思想はまったく浸透しておらず、依然として封建的な身分制や礼教制度が人々の思想の根源にあります。民衆は「無知蒙昧」（孫文の言葉）のあまり、革命者の言動を理解することすら不可能でした。事実、これらの中国社会の基礎となる部分は中国国土のほとんどを占めていたのです。

知識の伝達は当時の中国社会においては相当難しいことでした。民衆のほとんどは字が読めないからです。千年以上も続いた科挙制度は国家官僚を任用するいわゆるエリート選抜試験的なものでした。他方、封建的礼教制度の影響を受けて民衆の思想は束縛され、「女子无才便是德」（女性は才能がないのは徳である）といった考えが主流でした。近代が到来する以前に、学問はごく一握りの社会上流階級の特権的なものでしかありません。広大な中国で真の意味での近代国家の到来はもう少し歳月を要し、血と涙で築き上げられた抵抗と模索の中で実現していくことになります。

質疑応答

○山本珠 今日お話したかったのは、東洋的な学問体系から、日本においてもアジアにおいても西洋的な学問体系へと変わっていくという話でした。私が最初に日本の最高学府がどう変わったかという話をしました。その次に山本裕先生。特に後半部分で、若者たちが教養として西洋の古典を読む、こういう事象が生まれてきた。張先生は、中国の知識人たちです。西洋から直接学んだり、あるいは日本経由で学んだり、いずれにせよ西洋のことを学ばなければいけないと考えるようになった。このように東洋の学問体系から西洋の学問体系に変わったというのが、この150年の歴史で見られたことでした。

一つここで疑問に思ってしまう方が多いんじゃないかと思うんですけど、負けっぱなしでいいのかみたいところがありますよね。東洋の学問は一体どうなっていけばいいんだろう、と。このまま西洋の学問に負けっぱなしでいっちゃうのか。

私、一番最初に、昌平坂学問所の系統は廃止されてしまったと言いました。あれ、実は復活します。復活していくんですけど、それが結局天皇の神格化みたいなところとつながってしまい、また第二次世界大戦で負けたあと、今度はもっぱらアメリカ型の教育システムが入ってくるということとなり今に至っているわけです。ここで一つ張先生にお伺いしたいのですが、中国も西洋近代的な学問体系を学ぶようになっていきますよね。もともとあった儒学は、今中国国内ではどういう位置づけにあるのでしょうか。

- 張 新中国の建設や経済発展を図る際に、人材が必要でした。中華人民共和国建国後、人材不足が大きな課題となり、政府は西洋方式の教育を取り入れて、各種産業の発展に必要な専門的な知識と技術を持った人材の育成に力を入れました。大学を例にとりますと、1950年代に、まず全国の大学の中で少数の「重点大学」を指定して、集中的に資源を投入しました。その後、これらの大学での教育成果を全国の大学へ波及させていくと同時に、大学の数も増やし、より多くの若者に高等教育を受ける機会を広げました。こうした中で、総合大学だけでなく、工業、医薬、農業、政治、経済、師範、外国語、芸術、体育、軍事など数多くの専門性の強い大学も創設されました。

近年、中国は急速に経済が成長して国民の生活も豊かになってきました。残念なことに、あまりにも発展の速度を重視したあまり、これも発展途上国が経済発展を図る際に生じる共通的な問題かもしれませんが、環境や道德の側面における問題が顕在化されました。たとえば、環境汚染、食品安全の問題に反映される商業道德の問題、腐敗の問題、拝金主義の問題など、いずれも「人間はどうであるべきか」といった倫理・道德的修養が問われるものばかりです。恥ずかしい話ですが、これらの現在欠けているとされる修養はまさに中国の大地で生まれ、中国の祖先が重んじていたものです。したがって、今、中国では、もう一度祖先の学問を大事にし、民族の伝統的精神文化の支柱となった儒教で重要視している「仁、義、礼、智、信」の道德観の精髓を学び直し、「父子、君臣、夫婦、長幼、朋友」との関係維持を構築・修復しなおそうという風潮が高まっています。

- 山本珠 ありがとうございます。一つ二つ、質問があればお受けできる時間があるかなと思うんですが、いかがでしょうか。
- 女性A 今、お話して下さったのはいわゆる一般の若者ではなく、エリートの方ですね。エリートでない、普通の人たちの研究は成されないのでしょうか、資料がないから。どうなのでしょう。
- 山本裕 ただ今いただいたご質問についてお答えします。ご指摘の通り、私が今回報告で扱ったのは、かなり学歴の高い人達です。もうちょっと言いますと、村一番の秀才の話です。そうすると、村二番以下の秀才達はどうかだったのかという疑問が生じるのは当然かと思えます。なかなか救われないうのが結果としては多かったということ、最初に申し上げます。しかし、学びたい彼らの気持ちが全ておさえこまれてしまったかという、決してそうではありませんでした。まず実業系の学校でサポートするケースがありました。例えば農業系の農業補修学校といったところで学ぶという機会がありました。それから新潟県のある農民の大正期から昭和期までの日記が復刻されているのですが（＝『西山光一日記 1925-1950年—新潟県—小作農の記録』東京大学出版会、1991年）、それを見ますと、当時早稲田大学は早稲田大学の通信教育、早稲田大学講義録っていうものやっけていまして。それをマスターしましても学歴は獲得できないんですけど、早稲田で使っている教科書とか授業カリキュラムのものを通信教育で送ってきて、問題とかを答えて送ると採点して返ってくるみたいなものを、結構向学心の強い農村の若者たちは受講していたりするケースというのが結構あります。

ただそれが学歴に結びつかないということ、加えて、日々の農作業で忙しいのでだんだんやめたりするケースも実際には多かったんですけど、学びたい彼らが全く学べなかったわけではなかったというこ

とも指摘させていただきます。

○山本珠　ほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

今日は近代化と学問をテーマに、150年経った建物の中で、日本の近代の学問、あるいはアジアの学問に、どのような西洋からのインパクトがあったのかということをお話させていただきました。我々としても普段大学の中で話をしていると、まさに近代の何の変哲もない建物の中で授業をしているという感じではありますが、この雰囲気の中でお話しするのはいつもと違う体験ができたなというふうに思います。

次の機会が設けられるかどうかというのはなんともお約束はできないんですけど、もともとのきっかけが文化財を活用するということでしたので、多度津町、あるいは香川県全体に文化財建造物はたくさんありますので、また機会がありましたら多度津町外の文化財にも足を運んでいただければと思います。

今日は長時間にわたりましてありがとうございました。